令和 4年 4月 25日

若手研究者海外挑戦プログラム報告書

独立行政法人日本学術振興会 理事長 殿

受付番号 201980345

氏名 伊藤 里華

若手研究者海外挑戦プログラムによる派遣を終了しましたので、下記のとおり報告いたします。
なお、下記記載の内容については相違ありません。

記

- 1.派遣先：都市名 パリ (国名 フランス)
- 2.研究課題名 (和文)：シモン・ヴーエによるアカデミー・ド・サン・リュクにおける教育プログラム
- 3.派遣期間：令和 3年 3月 30日 ~ 令和 4年 3月 29日 (365日間)
- 4.派遣先機関名・部局名：パリ第10大学 美術史考古学学科
- 5.派遣先機関で従事した研究内容と研究状況 (1/2 ページ程度を目安に記入すること)

派遣先での研究内容

本研究は17世紀前半のパリにおいて活躍した画家であるシモン・ヴーエ (Simon Vouet, 1590-1649) の活動に関する研究である。この画家はルイ13世の治世下で国王首席画家として宮殿や聖堂といった公的な注文を受け、フランス・バロック美術の中心的人物であったにも関わらず、現在忘れられた画家の一人であるといえる。本研究期間には、王立絵画彫刻アカデミーの設立にヴーエが対抗して設立した、パリのアカデミー・ド・サン・リュクと呼ばれる私立アカデミーにおける教育プログラムをはじめとする彼のパリにおける活動について調査をおこなった。彼が理想とした教育とはどのようなものだったのか。また、彼の制作過程における方法は何であったのか。この二つの問いを立て、それらを可能な限り立体的に捉えることを目指したものである。

研究状況

彼が最も影響力を持っていたのはパリの聖堂装飾の分野であった。彼が手掛けたパリの聖堂の主祭壇はその多くが革命期に破壊されたが、そのうちサン＝ニコラ＝デ＝シャン聖堂 (主祭壇制作年、以下同：1629年)、サン＝トゥスタシュ聖堂 (1635年)、サン＝ルイ聖堂 (1640年)、サン＝メリ聖堂 (1645年頃) のものは現在も絵画作品とその聖堂が現存している。派遣期間中には20世紀以前に建立されたほぼ全てのパリの聖堂に実際に訪れ、17世紀の聖堂装飾の特性についての基礎的な判断力を築いた。また、サン＝トゥスタシュ聖堂に設置されていた作品の所蔵先であるナントで作品を実見し、美術館の資料室で未刊行資料や19世紀から続く作品目録の写しを入手した。その結果、ヴーエが作品に用いた色彩、構図の理想像と実際に制作過程の中で参照したことが推測される先行作品について特定することができた。

6.研究成果発表等の見通し及び今後の研究計画の方向性 (1/2 ページ程度を目安に記入すること)

研究成果発表等の見通し

本派遣期間中はパリの国立美術史研究所 L'Institut national d'histoire de l'art (INHA)を拠点とし調査をおこなった。日本国内では手に入らなかった多くの文献を調査することができ「シモン・ヴーエ作《キリストの神殿奉献》における雄山羊のモチーフ」という題で『美術史』に論文を投稿した。また同時に、ヴーエが主祭壇を手掛けたサン＝ルイ聖堂（現在はサン＝ポール＝サン＝ルイ聖堂）を実見できたことで「研究ノート：パリのサン＝ルイ聖堂完成当初の主祭壇における王権称揚のテーマ」を *Aspects of Problems in Western Art History*（東京芸術大学西洋美術史研究室紀要）に投稿することができた。以上二点は派遣期間中に投稿し、採択となり 2022 年 3 月に刊行された。

さらに、研究状況の項で先述したように、サン＝トゥスタシュ聖堂の主祭壇に設置されていた二つの作品《聖エウスタキウスとその家族の殉教》(1635 年、サン＝トゥスタシュ聖堂に現存)、《聖エウスタキウスとその家族の昇天》(1635 年、現在はナント美術館に所蔵)について、制作過程の中で参照したことが推測される先行作品について特定することができた。この研究内容について、今年度中に学会発表、ならびに論文の投稿をおこなう計画である。

今後の研究計画の方向性

以上に述べたように、彼の制作過程における方法についての調査は大いに進んだものの、彼のアカデミーにおける活動についての調査は、まだ基礎情報を整理し新たな資料を収集した段階にある。今後は彼の教育方針やその指針について、これまでに明らかになっていない部分を提示できるようにしたい。彼の公的な注文に関する研究の枠組みでは、サン＝トゥスタシュ聖堂の主祭壇に関する論文の投稿後、ヴーエによる作品の中でも最も神学的な作品とされるサン＝メリ聖堂の祭壇画について着手する予定である。

7.本プログラムに採用されたことで得られたこと (1/2 ページ程度を目安に記入すること)

本プログラムに採用されたことで、受入先であるパリ第 10 大学のマリアンヌ・コジャノ・ルブラン教授に研究内容についてご指導いただいたことは、今後の研究の方向性を定める大きな契機となった。採用期間の前半は新型コロナウイルスの感染拡大に伴い、夜間外出制限や、美術館など生活に必要不可欠ではない施設は休業となっていたことで調査に出ることが難しかったが、幸いにも国立美術史研究所は利用することができ、大学や美術館などの休業期間を利用して論文執筆に集中することができた。

後半からは大学の授業が対面で再開し、コジャノ教授の Master 2 のゼミナールに参加することができた点は大変有益であった。ゼミナールでは、学生 3、4 人のグループによる調査・発表が主におこなわれ、個人で課題を進めていくことが多い日本とは異なる形式で学ぶことができた。また、そのゼミナールは、大学の教室のみならず、18 世紀よりフランス陶磁器の代表的な製作拠点となっていたセーヴル製作所でおこなわれることもあった。セーヴル美術館の学芸員数名とコンタクトを取りながら課題を進めていくという点も、フランスの学芸員の仕事を間近で見ることができ、大変な刺激となった。

また、ルーヴル美術館の講堂でおこなわれたフュマロリ追悼コロックやパリ郊外のソー城で開催された 17 世紀のフランス美術における古代の想像に関するシンポジウムなど、自身の研究分野に近い研究者の発表を聞く機会に積極的に参加できたこともパリを派遣地に選んだ利点であった。

派遣期間中には、サン＝トゥスタシュ聖堂の主祭壇に設置されていたヴーエ作《聖エウスタキウスとその家族の昇天》(1635 年)を実見しにナントへ、そしてサン＝ルイ聖堂の主祭壇に設置されていたヴーエ作《聖ルイ礼賛》(1640 年)を実見しにルーアンへと、地方都市の美術館においても調査することができた。ナント美術館では作品資料室に訪問することができ、パリでも集めることが難しいナント美術館の作品目録における記述や学芸員による調査レポートの写しなどを収集することができた。以上のように本プログラムに採用されたことで、海外の研究者と交流を持つことができ、日本国内で収集することがほぼ不可能である資料を集めることを可能となった。いただいた環境に心から感謝したい。